

ネットワークと語学教育：その軌跡をたどる

朝 尾 幸次郎

1. 序

インターネットの社会への本格的な普及が始まってからほぼ10年、インターネットはすでに社会の基盤として定着した。インターネットの普及は、印刷術、産業革命、交通革命などの技術革新と並ぶものである。しかし、その普及と定着の速度はこれまでにないものであった。変革があまりにも急なため、われわれの目は技術革新の細部に向けられがちになり、そこで何が起きているのか、見えにくくなっている。

マクルーハンは「メディアはメッセージである」という警句により、メディアの内容と形式を切り離すことの危険性を指摘した。マクルーハンによれば、メディアの形式が変わればメッセージの質に変容が起こる。活字媒体で書かれた小説を映画に仕立てた場合、そこに描かれるストーリーは同じものであっても、それが伝える意味は異なるというのが彼の指摘である。

語学教育とインターネットを考える場合にも、この視点は重要である。インターネットを利用すれば、だれとでもすばやくメッセージをやりとりすることができる。インターネット上に公開されたテキストやマルチメディア作品を好きなときに利用できる。しかし、その効率、利便性に目を奪われると、インターネットが語学教育の何を変えてきたのかを見失うことになるだろう。この小論では、過去10年間、インターネット上で行われてきた語学教育の実践をたどり、その意味を検証しながら、インターネットが語学教育に与えた意味を考える。

2．インターネット上の語学教育実践の歴史

次は*The Los Angeles Times*と『朝日新聞』について、それぞれの記事データベースをもとに、1991年から2000年までの10年間、「インターネット」という語が現れた記事の数を数えたものである。

表1 新聞に現れた「インターネット」の記事の数

	<i>LA Times</i>	朝日新聞		<i>LA Times</i>	朝日新聞
1991年	0	0	1996年	2,779	2,418
1992年	0	0	1997年	3,316	3,890
1993年	75	1	1998年	4,523	3,805
1994年	430	97	1999年	7,628	5,335
1995年	1,432	693	2000年	9,011	8,476

1993年まで日米両国とも、一般の人々が「インターネット」ということばを目にすることはまずなかった。それが、1993年から翌年にかけて、インターネットという存在が人々の前に突然、大きく姿を現す。それまでインターネットということばでは語られなかったものの、コンピュータとコンピュータを接続し、メッセージを送受信することは研究者の間では行われていた。1979年に始まったUSENETがその代表である。また、ホストコンピュータに電話回線を介して接続し、ユーザがメッセージを交換する、いわゆる「パソコン通信」というしくみは、少数ではあったものの、一般の人々も利用していた。1979年、それまで大型コンピュータのタイムシェアリング・サービスを行っていたCompuServe社が電子メールサービスを開始したのはその例だ。

しかし、コンピュータ・ネットワークが、現在、インターネットとよばれる形で明確にその姿を現したのは1991年のことであった。この年、インターネットはそれまでの研究利用から商用を含めた一般利用への開放が行われた。ただし、その技術を一般の人々が利用する基盤は整備されてはいなかった。インターネットが人々の手の届く身近な存在となったのが1993年の

Mosaicの開発である。これは現在使われているブラウザであるNetscapeの原型となったものである。Mosaicの開発により、コンピュータの知識がなくても、だれもが簡単にインターネットを利用できるようになった。1994年以降、インターネットが一般に急速に普及した背景にはMosaicの開発があった。

インターネットはいつ世に現れたのか。その技術的源流をたどれば米国のARPANETにたどりつくだろう。しかし、社会的には表1でわかるように、1993年から1994年がその始まりと言えるだろう。1993年雑誌*Time*は“First Nation in Cyberspace”という記事で、インターネットが突如、爆発的な拡大を始めたことを報じている。1993年あるいは1994年はいわば日米ともに「インターネット元年」とも言える年であった。

さて、インターネットにおける技術革新と並べて語学教育におけるインターネット利用の歴史をまとめたのが表2である。

表2 インターネットと語学教育の略年史

年	ネットワーク	語学教育
1979	USENET発足 CompuServe社、電子メールサービス	
1983		TeleClass International始まる
1989	CompuServeとインターネットが接続	
1990	CERNでWWWサーバ、ブラウザを試作	
1991	インターネットの一般への開放 WWWサーバ、ブラウザの公開	
1992		Robertsらによるメール交流
1993	Mosaicの公開	IECC TESOL-L International Writing Exchange
1994	インターネットの普及	Dave's ESL Cafe schMOOze University
1995		The Virtual English Language Center Exchange Susan GaerによるEmail Projects

3．実践の内容と特徴

3.1 TeleClass International

語学教育を教室という限られた空間から解放し、異文化との交流をめざそ

うとした試みは、実はインターネット以前から存在した。郵便による文通は以前から広く行われていた。また、電話が普及するとFAXでメッセージや絵を交換する試みも行われてきた。

そのなかで特筆すべきは、米国ハワイ州の言語専門官、ウォルステイン (John D. Wollstein) が始めたTeleClass Internationalである。ウォルステインは第二言語習得クラスの生徒がドロップアウトしていく率の高さに衝撃を受け、外国語学習の動機付けを高め、現実の世界で生徒がてごたえを感じることのできる言語学習のありかたを考えた。その結果、考案したものが、電話回線を使って遠隔地の教室と教室を結ぶという方法である。

電話回線を使うというのはなかなか秀逸な考えであった。当時、コンピュータを接続するネットワークの技術革新は進みつつあったものの、その利用は現実的ではなかった。学校ではネットワーク機材や回線などの基盤は整備されておらず、また、基盤があったとしても、学校が年間単位で利用料金を負担するのはむずかしかった。しかし、電話回線はどの学校にも必ずあり、新たな設備投資をする必要がない。TeleClassではSlow-Scanという機材を使う。これはブリーフケースほどの大きさの、持ち運び可能な小型機材である。このSlow-Scanを電話回線に接続すると、数秒ごとに静止画をテレビモニターに映し出すことができる。つまり、双方向で相手の映像を見ながら、電話で会話することができるわけだ。これを利用するのに特別な知識は必要としない。また、Slow-Scanは借り出して利用し、利用した時間だけ電話料金を負担すればよい。TeleClassは、インターネットが本格的に始まる前、既存の技術だけでその後の思想を先取りしようとした試みであった。

3.2 Intercultural E-mail Classroom Connections (IECC)

1992年、セント・オラフ大学 (ミネソタ州) のロバーツ (Bruce Roberts) 、ソーシャム (Howard Thorsheim) 、ライス (Craig Rice) の3人は日本の学校とメール交流プロジェクトを行った。交流は成功裏に終わったものの、そこで課題として残ったのが交流校を探すことのむずかしさである。この経験から、翌年、3人はInternational E-mail Classroom Connectionsという交流校紹介サービスをメーリングリストとして始める。メーリングリストに登録すれ

ば、交流校募集の案内をリストに流すことができ、また案内を受け取ることができる。

メーリングリストが公開されてから1週間、全世界から200人を超える登録者があり、交流校募集のメッセージは50通以上が配信された。メールによる交流はパソコン通信の時代からすでに行われていたものの、1993年には広く普及していたことがわかる。

その後、IECCはその名を*International E-mail Classroom Connections*から*Intercultural E-mail Classroom Connections*に変える。これはメール交流が国と国との間だけでなく、同じ国のなかで別の学校との交流もその視野に入ってからである。また、後に、IECCは若い人と年配の人を結ぶメール交流の仲介も行うようになる。

3.3 TESOL-L

1993年、世界最大の英語教育学会であるTESOLを母体とするメーリングリストTESOL-Lが発足する。これは英語教員を対象としたメーリングリストで、分野別に細かく分かれているのが特徴である。現在でもおそらく英語教育関係のメーリングリストとしては最大規模である。上に述べたIECCと同じく、この時期、メーリングリストが教員の情報交換の大きな手段であったことがわかる。

3.4 International Writing Exchange (IWE)

1993年、ヘルシンキ工科大学のヴィルミ（Ruth Vilmi）がメールとWebを使った新しいライティング・プロジェクトを発足させた。これは元来、ヴィルミが大学での授業として行っていたもので、それが大学を超えて広がったものである。参加者はメールで作文をヴィルミ宛てに送る。ヴィルミの側では、プログラムによりそれをHTML文書化してWebに掲載し、蓄積していく。つまり、書く場合にはメールを、読むのはWebを使う。このようにすることで学生はたがいに作文を読み合うことができる。

このプロジェクトは5～6週間単位で進んでいく。これをラウンド（round）とよぶ。世界各国の学生が集中して意見を交換し、読みあうため、

作文を提出する締め切りは土曜日の24時と決められている。1週目は参加するための準備で、IWEのしくみときまりを読み、テスト・メッセージを送り、メッセージの送り方、読み方を学ぶ。2週目で自己紹介の文章を送り、400～500語で自分が選んだトピックについて文章を書く。オンラインで行うこのようなプロジェクトの強みは過去の作品を蓄積していくことができる点である。どのように書いていいのかわからないという学生は、これまでのラウンドで蓄積されている作文を読んで、書き方のヒントを得ることができる。

IWEがこれまでのライティングの実践と異なるところは、なによりも、添削をしない点である。従来のライティングでは課題が与えられ、作文を教師に提出、教師は作文を添削し、学生に返すという方法が行われてきた。しかし、IWEでは英語の誤りを直すことはない。学習者の典型的な誤りを紹介したWebページは用意されているものの、これは作文を書くための補助である。作文はたがいに読みあうことができる。ここでの関心は、だれがじょうずに書いたかということではなく、何を書いたか、その内容である。文化を異にする学習者が同じ話題についてどのような考えを持っているか、たがいに読みあうのがこのプロジェクトの眼目である。¹

3.5 Dave's ESL Cafe

翌1994年になると、Webを中心とした英語教育プロジェクトDave's ESL Cafeが現れる。これはカリフォルニア州立大学ノースリッジ校のスパーリング (Dave Sperling) が始めたもので、現在、インターネット上でおそらく最大の規模をもつ英語教育サイトである。

これもヴィルミのIWEと同じく、大学の授業のなかから生まれたものである。スパーリングは大学で留学生を対象にライティングを教えていた。しかし、学生の動機付けは低かった。彼はちょうどその頃普及が始まったインターネットに目を向け、ライティングをWeb上に掲載することを考えた。当時まだ珍しいデジタルカメラでクラスの写真を撮り、学生の作文とともにWebページに公開した。すると数週間後、世界各地からメールが届くようになり、学生が熱心にそれを読む。そして毎日、毎日返事を書く。学生の英語に取り組む姿勢が変わり始める。スパーリングはこの実践を授業のなかだけにとど

めておくより、広く一般に開放することを考え、これが現在のDave's ESL Cafeにつながった。²

これはインターネットというメディアが語学教育をどのように変容させるかを示す好例である。それまでの教室で行ってきたライティングの授業に、なぜ学生は興味を示さず、インターネットに公開し、各地からメッセージが届き始めたかとたん、なぜみずから進んで英語を書くようになったのか。伝統的な教室での授業をインターネットというメディアに移すということは、単にメディアを変えることではない。授業の意味、学びの意味を変えるという点で重要な示唆を与えるものだ。

3.6 schMOOze University

同1994年、ニューヨーク市立大学のファルセッティ (Julie Falsetti) が schMOOze University という、それまでにない新しい試みを始める。メール、Webなどの非同期型のメディアでは、ユーザが通信を行う場合、双方が同時にネットワークに接続している必要はない。これに対し、ファルセッティが行ったのはMOOというしくみを利用した同期型のコミュニケーションである。

MOOとはインターネット上に構築された仮想空間である。参加者がキーボードからメッセージを送ると、スクリーン上に表示され、参加者が読み合うことができる。チャットと違うのは、町や学校などの仮想空間が作られていることである。MOOに入ると、コマンドを打ち込むことで場所を移動したり、扉を開けたり、物を手に取ったりするといった動作を仮想的に行うことができる。一般には多人数が参加するロールプレイング・ゲームとして使われることが多い。

MOOを外国語学習に利用できないかと考えるのは自然なことである。MOOでは文字に書かれた説明を読むことで場面を理解し、キーボードからメッセージを打ち込むことで会話を行う。しかも、言語活動を具体的な場面のなかで行うことができる。

しかし、一般に行われているMOOに外国語学習者が参加するには壁がある。言語能力では母語話者と大きな差があり、外国語学習者は疎外感を感じるようになるからだ。

ファルセッティが構想したのは外国語として英語を学ぶ人々が集まるMOOである。そこには英語母語話者も参加はしている。しかし、彼らは場面のなかでは後景にやや退いて学習者の支援をするのが役目である。

schMOOze Universityは仮想の大学という設定である。事務棟、教室棟、寮、文化センターなどが作られ、その間を自由に往来しながら、そこに集まる人々とチャットを交わすというのが主な活動である。schMOOzeという名前は「おしゃべり」を意味する俗語schmoozeと、この仮想空間を指すMOOから来たものである。³

3.7 The Virtual English Language Center

1995年、インターネット上に語学学習教材の新機軸が現れる。ニューヨーク大学のカッパス (Ellen M. Kappus) とロジャーズ (J. David Rogers) の始めたThe Weekly Idiomである。これはその名のとおり、毎週ひとつずつ英語のイディオムをとりあげ、その意味を解説するとともにイディオムを使った会話例を公開したWebページだ。このWebページが人を驚かせたのは会話を音声で聞くことができることであった。当時、インターネットは文字によるコミュニケーションがほとんどで、インターネットに語学教育の可能性を探る人の間にも、音声なしの語学学習には不安を感じていた。The Weekly Idiomはインターネットに現れた語学教育プロジェクトのなかで、おそらく音声をはじめて本格的に利用したものであろう。

しかし、カッパスとロジャーズの功績は音声を導入したという事実よりも、次に立ち上げたFluency Through Fablesであろう。これはイソップ物語のテキストを提示し、これを読んで単語と内容理解を試すテストに答えるというものである。これだけであれば、従来の印刷媒体による語学教材と違いはない。毎回の教材には Written Discussion Exercisesというページがあり、「この寓話の教訓に賛成か」「同じような経験をしたことはあるか」といった質問に対して、Web上からコメントを書き込むことができるしくみがある。投稿されたコメントは順次Webページに掲載され、だれでも読むことができる。しくみとしては簡単ではあるものの、学習者どうしがコメント読みあうということは従来の教室では考えられなかったものである。The Weekly Idiom、

Fluency Through FablesはともにThe Virtual English Language Centerというサイトの一部として公開された。

3.8 Exchange

Fluency Through Fablesが公開されたのと同じ1995年、「たがいに作品を読み合う」ことを正面に打ち出した企画がインターネット上に公開された。イリノイ大学のレイヴィン(James Levin)らを中心に行われたExchangeである。Exchangeは「電子ハイパーテキスト雑誌」と銘打っている。各国の英語学習者がエッセイ、物語、料理のレシピなどを投稿する。Exchangeではこれらの投稿を審査し、選んだものをWeb上に掲載する。選ばれなかったものには推敲のためのアドバイスが返事として返される。カップスとロジャーズが始めたFluency Through Fablesには学習者が共通のテーマについて意見を表明し、それをみんなで読みあうことができるしくみが付属していた。Exchangeはこの考えを中心に構成したものである。

3.9 ギャーによるEmail Projects

同じ1995年、上にふれたインターネット上における英語教育の考え方を集大成するようなサイトが登場する。サンタ・アナ大学のギャー(Susan Gaer)によるEmail Projectsである。これもスパーリングのDave's ESL Cafeと同じく、教室での実践がもとになってできたものである。この実践の基盤にあるものは「プロジェクト志向による語学教育」という考えである。

ギャーは元、カリフォルニア州の成人学級で移民に英語を教えていた。生徒はラオス出身の移民の成人であった。当初、用いていた教授法は文法を中心にしたものである。しかし、その授業は成果を上げず、生徒の動機付けも低かった。ギャーはその頃知った「意味のある活動に参加することを通して言語を学ぶ」という考えに触発され、生徒に故国の料理のレシピを英語で書く取り組みを行わせる。食材を教室に持ち込み、その名前、分量の量り方、調理の方法について、その英語の表現を学ぶ。教室では実際に料理を作り、最後に英語で書いたレシピが料理書としてまとめられる。

レシピを題材に使うというのは秀逸な考えだ。食材や調理法などの題材や

表現は学校で習う英語にはあまり出てこない。しかし、そこで使う語彙は限られており、文型もほぼ命令文で書けるという利点がある。また、なによりも、食べ物については人それぞれに思いがあり、文化的な違いがある。

ゲアーによる実践の意義がもっとも明確に現れているのは民話プロジェクトである。移民の生徒たちが故国で聞き覚えた民話は口承文芸として文字になっていないものが多い。それらは彼らが移民として米国で暮らすようになると失われていく運命にある。この民話を文字に残し、彼らの子供たちに伝えようというのがその発想であった。

この目的のため、小学校で行う民話の授業との連携をゲアーは企画する。移民たちが自分たちの聞き覚えた民話を紙芝居風にまとめ、英語で小学生に話して聞かせるというものである。ラオス移民の英語は初級レベルである。小学生であるとはいえ、英語母語話者に語って聞かせることができるのか。当初、生徒たちは尻込みをしていた。作業は移民の生徒と小学生の共同作業として進められた。移民の生徒が話を英語で小学生に語る。この段階では生徒の英語は意味が通じないものが多い。小学生はそれに対し、質問を繰り返しながら、英語でストーリーを書いていく。このようにして移民の生徒と小学生のやりとりのなかで民話は完成していく。発表の日に向けて、生徒たちは長い時間、絵を描き、英語を口に出して繰り返し練習をするようになる。

この後、ゲアーは同じような実践をインターネット上で始める。それが Email Projects である。ここにはレシピ集プロジェクトのほか、今ではインターネットを利用した交流の定番ともなっている、各国の価格調べなども行われ、インターネット上の英語教育プロジェクトの大集成の感がある。⁴

4．インターネットがもたらした変容

4.1 実践から理論へ

表2に示したインターネットの技術革新の歴史とインターネット上に登場した英語教育関連の主要なできごとを比べてみると、このふたつが同期するように現れていることがわかる。すなわち、インターネット上に現れた語学教育の実践はインターネットの技術革新に触発されたものだということだ。

これまで外国語教授法は言語理論を背景に現れることが多かった。その典

型はオーラル・アプローチである。オーラル・アプローチの元となったのはアメリカ流の構造言語学である。構造言語学は行動主義を背景とし、言語は記号の体系であり、言語は習慣によって習得されるものと考えた。したがってオーラル・アプローチでは、パターンを与えることと、それを繰り返して学ばせることが教授法の核心となった。言語は構造により成り立つものであるから、パターンを提示することで構造が学習され、それを繰り返すことで習慣として定着されるというのがその考えである。

インターネットに現れた教育実践は言語理論を背景に生まれたものではない。インターネットにおける技術革新に触発され、実践を行うことで、言語学習に対する洞察を深めてきたものである。これまでの言語教授法は理論から実践を生み出してきたのに対し、インターネット上の活動は実践のなかから「理論」を生み出そうとしてきたと言える。

schMOOse Universityでファルセッティはあるとき参加者がチャットしている様子をモニターしていた。会話しているのはアメリカ人学生とペルー人学生である。ペルー人学生の英語は動詞の人称変化がすべて脱落していた。しかし、会話は滞りなく進む。メールでもチャットでも、英語に誤りがあってもそれが話題になることはない。意味そのものに関心が向けられるのがメールやチャットの大きな特徴だ。20分ほどたった頃、ペルー人学生の英語に突然、人称変化が現れ始めた。会話の相手のアメリカ人学生が教えたわけではない。ふたりの会話のなかでペルー人学生がみずから人称変化のきまりをみつけたわけだ。

このエピソードは言語使用の正確さはどこから生まれるか、そのてがかりを与えてくれる。これまでの教授法では、オーラル・アプローチのように徹底して「形」をパターンとして習得させることで言語使用の正確さが習得されると考えられてきた。しかし、言語使用の正確さを身につけるには、意味のある言語活動に参加し、学習者みずからがそこから言語規則を発見し内在化させることが必要ではないのか。インターネット上の語学教育活動からは、このように実践からつむぎ出された知見が生み出されつつある。

4.2 プロジェクト志向

インターネット上に現れた語学教育活動は一見、構造的、体系的が欠けているように見える。アイデア、思いつきで活動を行っているように見えなくもない。パソコン通信の時代から広く行われてきたメールによる交流はその典型だ。そこでは「学校生活について紹介し、質問をする」というテーマが設定されるだけで、何を学ぶか、行動目標が設定されることがない。また、詳細な手順を示した指導案も作りにくい。メール交流ではどのような返事が返ってくるかわからないから、あらかじめ何を返事を書くか、学習項目を予定することはできない。設定できるのはいつまでに返事を送るという交流の日程くらいだ。

これはインターネット上の教育活動が散漫に行われているということではない。教室で行っている学習活動そのままをインターネット上に移すのであるなら、同じような体系的、構造的にしたがった授業案を作ることができるだろう。しかし、インターネット上の教育活動ではあらかじめ学習内容を設定しておくことはむずかしい。インターネット上で行われる学習活動は従来の教室での学び方とは大きく異なるからだ。

インターネット上に現れた語学教育の活動に共通する特徴はそれがプロジェクト志向であることだ。一般の教育過程ではシラバスに取り上げられた事項について教育目標を設定し、学習活動を行うという手順がとられる。しかし、上にとりあげたインターネット上の活動では行動目標を設定するという意識はほとんどみられない。ゲアーの実践では「自分の文化の料理のレシピを英語で書く」「自分の文化の民話を英語で小学生に語って聞かせる」という活動がまず示される。schMOOze Universityであれば、「キャンパスを自由に移動して知らない人3人にインタビューし、最後に全員で集まって報告をしあう」という活動の内容が示される。

このような活動は当然、レシピ集を作る、民話集を作るというように、作品を共同で仕上げるプロジェクト形式につながる。実際、インターネット上に現れた主要な語学学習の活動はプロジェクト的性質を帯びている。ゲアーはこれを「プロジェクトを基盤とした学習」(Project Based Learning)とよぶ。彼女によれば、それは「学びを生む、意味のある活動に学習者を参加させること」(involving students in a meaningful project that results in them learning)で

ある。⁵

4.3 教室と実世界の連続性

インターネット上で行われる語学教育活動には教室の枠を超えた活動という共通点がある。ヴィルミのIWC、スパーリングのDave's ESL Cafe、ゲアーのEmail Projectsのどれも元来は、教室で行われた活動が教室外に拡大したものである。IWCはヴィルミがヘルシンキ工科大の彼女のクラスで行っていた活動であったものが、学外からの参加者を迎えることで世界的なプロジェクトとなった。

インターネットを利用した教育活動を論じるとき「教室をつなぐ」「教室の壁を超える」ということがよく言われる。インターネットを使った教育活動はその多くが他の学校との交流という形で行われる。これまで会ったこともない生徒と身近にメッセージを交わすことができるというのは、従来の教室だけの学習では経験のできない大きな驚きであった。しかし、「教室をつなぐ」ということを単にクラスとクラスが交流できるという視点で考えると、そのほんとうの意義を見失うことになる。

一般に教室で行われる教育活動はどの教科であれ、IREというフォーマットにしたがうことが多い。IとはInitiate、すなわち教師から生徒へのコミュニケーションの働きかけである。理科の授業で「重力とは何だろう」と教師が生徒に問いかけるのはその例だ。これに対して、生徒は「地球が私たちを引っ張る力です」のように答える。RはRespond、すなわち、教師の働きかけに対する生徒の応答である。これに対して、教師は答えが正しければ、「そのとおり」、誤っていれば「違います」と生徒の応答を評価(Evaluate)する。

このような教師と生徒の会話はいわば「疑似コミュニケーション」である。教師が「重力とは何だろう」と質問を投げかけるのは、重力とは何かを教師が知りたいからではない。教師は重力とは何かを知っている。生徒が答えるのは「教えてほしい」という教師の求めへの対応ではない。自分が求められている理解を正しくしているかどうかを教師に示すためである。英語の授業で教師が生徒に“How old are you?”という質問を投げかけ、生徒が“I am

sixteen years old.”のように答えて会話が成立するのは、教師も生徒もたがい
にこれが「疑似コミュニケーション」であることを知っているからだ。教師
は生徒が何歳かすでに知っている。それでもなおも質問をするのは、表現を
理解できるか、正しい形式で応答できるかを試しているからだ。生徒が
“Sixteen.”と答えると、教師が“I am sixteen years old.”と答えるよう訂正させ
ることさえ可能である。

「教室を超える」ということは実はIREを脱却するということだ。これまで
海外とのメール交流プロジェクトが数多く行われてきた。そこに共通する
のは「英語の誤りを添削しない」ということだ。教室で行われる外国語学習
は理解と表現の正しさに目が向けられる。そこでとりあげられる内容は「形」
を取り扱うために便宜的に選ばれているにすぎない。メールやFAXを初めて
使うとき、「これはメール（FAX）送信のテストです」といった内容を書いて
送ることに似ている。書かれている内容に関心があるのではなく、正しく
送信できるかどうかに関心事なのである。「教室を超える」ということは、
そこで行われるコミュニケーションを疑似コミュニケーションから実世界で
行われるコミュニケーションへ変容させることなのである。

Gaer (1998)はプロジェクト志向の実践の意義を論じた約2,600語ほどの短
いペーパー“Less teaching and more learning”でmeaningfulという語を6回繰り
返している。教室におけるIREから教室と教室外の世界をつなぎ、教室での
経験を実世界の意味のある経験にすることこそが、インターネットを教育活
動に導入する大きな眼目である。

4.4 異文化的視点

近年の語学教育における新機軸のひとつは異文化理解である。リーディ
ングやライティングに異文化的話題を積極的に導入し、聞く・話す活動におい
ても異文化間コミュニケーション的視点が取り入れられてきた。これは言語
は文化と不可分のもので、言語を学ぶには文化の理解が必要との認識に支え
られたものであった。

しかし、言語教育における文化の扱いはあくまでも言語教育を進める支援
の役目であった。リーディングの素材に異文化的話題を扱うのは、異文化理

解が目的ではなく、学習活動を内容の面からより豊かにすることで言語形式の学習効果を高めるのがそのねらいであった。

インターネット上に現れた語学教育実践の特徴のひとつは文化を周辺の位置からその中心にすえている点である。ヴィルミのIWCは文化を異にする学習者が同じ話題について文章を書き、たがいに読みあうところに意義がある。ゲアーのEmail Projectsはラオス移民の文化を後世に残していこうという思いから始まったものである。ラオス移民が米国で生活するなかで、故国の料理法を残していきたい、口承文芸として伝えられてきた民話を文字として残したいという目的があった。

インターネット上の語学教育では相手との文化的違いが学びを生み出す決めてとなる。IECCのIはInternationalを表すものであったが、後にInterculturalを表すものとなった。それはメール交流が海外とのものから、同じ国内の他の地域との交流にも広がったからである。これは異文化との交流という視点が後退したのではなく、その視点がより先鋭化して認識されたことを示す。元来、海外との交流として始まったメール交流の活動は、海外で行うところに意味があるのではなく、自分たちと生活、考え方、価値観を異にする人々と交流するところに意味があると認識されたのである。IECCはその後、Intergenという交流の仲立ちを始める。これは50歳以上の人々と若い学習者との交流プロジェクトである。それまでのメール交流では自分たちと考え方、価値観などを異にする相手として海外の人々が選ばれてきた。しかし、Intergenでは同じ国に住む人々で、年代が異なる人が交流の相手である。インターネットを利用した学習活動の中心にあるのは、地域、年代、個人と個人の差、すなわち広い意味での「文化的差異」であり、語学教育の実践もその例外ではない。

4.5 学習共同体の形成と文化的実践への参加

考えや価値観を異にする人々が集まり、交流し、学びあうというインターネット上の学習活動は、佐伯(1995)のこたばを借りれば「学びあう共同体」を作るということである。これまでの教室での語学学習活動は教師が学習計画を立て、言語素材を準備し、生徒はそれにしたがって「学ぶ」というもの

であった。そこでは教師は教える側、生徒は教わる側という明確な役割分担ができていた。教師と生徒との間には教える者、教えられる者という関係はあるものの、生徒と生徒の間にはかわりはない。しかし、インターネット上の活動では、IWCでもExchangeでも、たがいに作品を読みあうということが活動のかなめである。schMOOze Universityは仮想空間ではあるものの、そこに同じ学校に通う学生としてたがいに交流することで活動が成立している。いわば学習者がたがいに共同体を形成しているのがインターネット上で行われる教育活動の大きな特徴である。

その共同体で行われるのは創造的な活動への参加である。これは佐伯（1995）のことばを借りれば「文化的実践への参加」である。ゲアーのEmail Projectsではラオス人移民たちは小学校の生徒との共同作業のなかから故国の民話を物語として文字に記録し、音声による発表を行った。Exchangeは学習者がエッセイや物語を寄稿し、雑誌を発刊するというのがその目的であった。ともに文化的な実践に参加することでことばを学ぶというのがその考えであった。

これはLave & Wenger（1991）の言う「正統的周辺参加」の思想である。インターネット上の教育活動はLave & Wengerの思想により生まれたものではない。インターネット上で実践を進めながら、その教育的意義を探っていたところ、Lave & Wengerの思想をみずから具現化していたことを知ったものである。インターネット上の教育活動とLave & Wengerの「正統的周辺参加」の思想は、別々に始まり、同じ軌跡を描くにいったのであった。

5．フレネ思想の新展開

インターネット上の教育活動は、理論があってそれを実践したものではなく、インターネットという技術革新に触発され、まず実践が行われた。新たなメディアのうえで教育実践を行うことで、教育実践そのものの意義に変容をもたらしたというのがその特徴である。

メディアが教育の意義を変容させるという点では、インターネット上の教育活動にはその先駆的实践が存在している。フレネ（Célestin Freinet）による教育活動がそれである。1924年、南フランス、アルプスにほど近い片田舎

の小学校でフレネは言語教育の新しい試みを始める。印刷機の教室への導入である。子供たちは自分が決めた題材について作文をし、クラスで発表をする。発表を聞いたクラスの生徒は改善のための意見を述べる。みんなの意見で推敲された文章は印刷機にかけて文集にまとめられ、クラス全員で読みあわれる。その2年後、フレネは生徒の作文をもとに学校新聞の印刷を始め、国内の他の学校と新聞の交換をするようになる。

フレネの教育実践の意義は、印刷機を導入することで、言語教育に新しい意義をもたらしたという点だ。当時の言語教育では子供たちに創造的な活動をさせるのは無益なことという考えが支配的であった。そのため、言語教育の場で行われていたのは古典の名文暗唱であった。しかし、フレネは印刷機を教室に持ち込むことで、子供たちがたがいに作品を読みあう関係を築いた。フレネは印刷機というメディアを導入することで、言語教育を名文の暗唱から、作品の創造と、書き手と読み手の関係を築く実践に変容させたのであった。

過去10数年の間、インターネット上の語学教育活動に起こったのはまさにこれと同じ変容である。フレネの実践における「印刷機」を「インターネット」と読み替えれば、これはそのままヴィルミのIWC、イリノイ大学のレイヴィンらによって行われたExchangeと同じものになる。インターネットはフレネの教育活動における印刷機である。それは学習の便利さ、効率を変えたのではなく、学習共同体を形成し、文化的実践への参加によってことばを学ぶという新しい思想を生み出したのである。

注

1 IWEは現在も継続して行われている。

International Writing Exchange

<http://www.ruthvilmi.net/hut/Project/IWE/>

2 スパーリングが初めて制作したクラスのWebページは現在も残っており、読むことができる。

WELCOME TO DAVE'S ESL CLASS At CSUN!

<http://www.csun.edu/~hcesl004/CSUN.html>

現在のDave's ESL Cafeは次のとおり。

<http://www.eslcafe.com/>

3 schMOOze University

<http://schmooze.hunter.cuny.edu/>

4 Email Projects Home Pageでは過去の実践を読むことができる。

<http://www.otan.us/webfarm/emailproject/email.htm>

5 Problem/Project Based Learning

<http://hale.pepperdine.edu/~slgaer/pbl.htm>

参考文献

Elmer-Dewitt, P. (1993). First Nation in Cyberspace. *Time*. Dec. 6.

Gaer, S. (1998). Less teaching and more learning. *Focus on Basics*, (2)D. Available at:
<http://gseweb.harvard.edu/~ncsall/fob/1998/gaer.htm>

Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*.
Cambridge: Cambridge University Press. 邦訳 ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウ
ェンガー 『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』（産業図書、1993年）

Sayers, D. (1986). Sending messages: Across the classroom and around the world. *TESOL
Newsletter* (Supplement on Computer-Assisted Language Learning), 20 (1), 7-8.

Wollstein, J. D. (1986). Teleclass: The bottom line in second language learning. *CALICO
Journal*, (3)3, 9-10. Available at [http://calico.org/journalarticles/Volume3/vol3-
3/Wollstein.pdf](http://calico.org/journalarticles/Volume3/vol3-3/Wollstein.pdf)

佐伯胖・藤田英典・佐藤学 『学びへの誘い』（東京大学出版会、1995年）

The Internet and Language Teaching: A Retrospect

Kojiro ASAO

Key words: Internet, English teaching, legitimate peripheral learning, learning community, project-based learning

Since 1994, when the Internet made its appearance in society in a visible shape, a number of language teaching projects have been launched on the Net. Some of them were created, inspired by the technological innovations. Others evolved from classroom practices.

All these educational endeavors share some common features. Unlike most language teaching methodologies, they evolved without any theoretical background. Rather people who were involved in the new educational endeavors sought to generate philosophical insights from their projects. Their educational practices were strongly influenced by the idea of project-based learning. The learning emphasis was placed on meaningful communication rather than linguistic accuracy. By fostering meaningful communication, the educators endeavored to create a learning community.

Their approach was crucially distinct from the traditional IRE process, in which what happens in the classroom is essentially pseudo-communication. It is not clear if the educators who launched their inspiring projects were aware of the idea of legitimate peripheral learning; yet, in effect, they were attempting to actualize Lave and Wenger's new educational philosophy. This reminds us of Célestin Freinet's educational movement, in which he created reader-writer relations among his students by using class journals and school newspapers. The educational pioneers who developed new projects on the Internet during the past ten years were following the steps of

Célestin Freinet, actualizing his philosophy with the help of new technological innovations.

As Marshal McLuhan said in his axiomatic remark “The medium is the message,” the Internet has introduced a new meaning to language learning and teaching.